

# 常光寺々報

2021. 9

## 秋季彼岸会法要

九月二十三日（木）

朝十時～

昼十二時～

昼十四時～

## うち勤め

ご講師の先生をお願いせず、

読経のみのお勤めになります。

短い感話はさせていただきませんが、緊急事態宣言延長の場合はそのもさらに短くなります。前任職も朝だけはお勤めしたいと申しております。どの時間も正信偈のおつとめです。空気循環のため、本堂は扉を開けて、換気をしています。

検温・消毒にご協力ください。

マスクの着用もお願いいたします。

お経本とお念珠をお持ちください。

歴史の中には念仏弾圧によってお寺参りが刑罰の対象となったことはあっても、お寺へ参集すること自体が、命の危険につながるといわれる時代は初めてのことでしょう。

でも、人はコロナで死ぬのではありません。事故や病気、老衰で死ぬのでもありません。人はこの世に命を授かったときから死ぬことが定められているという絶対矛盾の中にあります。

二度とない人生です。今日一日を大事に過ごさせていただきましょう。

蓮如上人は、「仏法においては、明日ということがあってはならない。仏法のことには、急げ急げ」とも仰せになりました。

蓮如上人御一代記聞書

ご縁のある皆さんと一緒にお正信偈をおつとめさせていただき、お彼岸のご縁に合わせていただきます。

マンション等にお住いの方から、「お線香は臭いので規約で禁じられています」というお話を伺うことがあります。確かに変な臭いのお線香があるのも事実ですが、お線香と香水はルーツが同じであることはご存じでしょうか。

インドで生まれたお香が中国・日本へはそのまま伝来し、(練って)お線香となりました。一方インドからヨーロッパに渡った際に香りの成分だけを取り出して香水になりました。

お香というのはその名のごとく香りのよいものなのです。アロマテラピーに使われるようないい香りのお線香ならばきつとほかの住民の方からも許されるのではないのでしょうか。お香の香りはお浄土の香りを想わせていただくものとも言われます。

お彼岸にはいい香りのするお仏壇の前で、なき方を偲びお浄土を想いながら、お念仏していただきたいものです。

# 自分のもと 山本佛骨勸学

「無限への歩み」より抜粋

お彼岸になると、お墓にお参りをするとということ、これは皆さんがたいがい行っておられることかと思うのです。すなわち故郷へ帰ってお墓のおそうじをする。また大谷のご廟に参って、御本尊にお礼をし、先祖のお墓にお花を供えてお参りをする。そこに深い意味があるといわなければなりません。

先祖というのは、単に古い人というだけでなく、実は自分の出たものなんです。ですから、先祖を拝むということは、自分の出たものに帰るといふ意味があるわけです。お彼岸でも、ご法事でも、平生故郷を離れている人が、故郷に帰って何となく懐かしさが湧き、落ち着くというのは、結局自分の元に帰って来たという思いがあればこそだと思います。このように先祖のお墓を拝むという

ことは、単にそれだけの儀礼でなしに、自分の本当のもとに帰ったというところが根底にあるからで、そこをたずねるといわねばなりません。

中略



多くの人はお墓にお参りするということ、何かひとつの迷信のように思い、つまらないことだと簡単にかたづけられる人もありますが、私はそうばかりとは思いません。先祖のことを考え、そこに手を合わせて物を考えると、それは多くの生物の中で人間だけです。犬や猫が先祖のお墓を作りそこで手を合わすということはないでしょう。それに人間だけが、そんな儀礼を行うのはなぜでしょうか。それは自分の元を考え、自分の元に帰りたいという本能があるからではないでしょうか。もっといえば、「本当の自分とは何であるか——」本当の自分が知りたいという問

題にかかわっていく。そこに宗教的な理念につながるものがあるのではないのでしょうか。

そこを一般仏教では、すべてのものの根元を「真如」だとか「仏性」だとかいうことばで思考するようになったのでしょうか。

親鸞聖人も、真如とか、法性とか、仏性ということをおっしゃるが、お正信偈のはじめには、ひらたく

「帰命無量寿如来 南無不可思議光」といわれています。帰命無量とは、永遠の生命ということであり、不可思議光とは、何物にもさえられることのない、本当の自由ということでもあります。

要するに永遠の生命、何物にもさえられることのない本当の自由、そこに帰るといふことが、親鸞聖人によって示された信仰の世界であるということ、味わっていたいただきたいのであります。